

# 大分県佐伯市の若年層の可能表現

## ～佐伯鶴城高校での調査から～

松田美香

### はじめに

可能表現とは、「～(する)ことができる」を意味する形式を指し、本研究では動詞に続く助動詞相当のまとまりを対象とする。可能表現の研究では、可能の意味をさらに「能力(による)可能」「心情可能」「外的条件可能」「内的条件可能」の4区分するのがほぼ定説となっている。各地方言によって、それらの意味をどのような形式が担当するのかはさまざまな違いが見られる。

共通語を例にとれば、可能表現形式が動詞の活用によって可能動詞形(五段活用)～ラレル(一段動詞と「来る」)、デキル(する)に分かれているものの意味の違いはなく、最近では、いわゆる「ラ抜きことば」の流行によって、見れる mi-reru、食べれる tabe-reru、来れる ko-reru のように一段動詞・「来る」の可能形が可能動詞形の一部(乗れる noreru、触れる sawareru)と同じ reru を析出できる形になって活用差を無くす方向性が見られる。また、共通語には「飲むことができる」や「見ることができる」のような「動詞の辞書形+ことができる」もあるが、これも他形式との意味差は認められず、語数増によって可能の意味を強調する役割をしていると考えられる。国立国語研究所(1999)によれば、鹿児島方言の～ガナル(ガナッ)も一形式のみで可能表現全般を表せる。

さらに九州方言を見ると、北西部では～ユルと～キルが「心情可能(以下、心情とも)」「能力可能(以下、能力とも)」、～(ラ)レルが「外的条件可能(以下、外的条件とも)」「内的条件可能(以下、内的条件とも)」を表すという2区分が行われている。この範囲は長崎県、佐賀県、熊本県、福岡県と広い。宮崎県はやや特異で、「ヨー飲まん」などで能力的・心情的不可能を表し、「飲メル」などの可能動詞形や「飲むコッガデクル」などの～コトガデキル形も使われている。

さて、大分県では次のような現象が見られる。

「心情可能」と「能力可能」はマス形<sup>ii</sup>+キル(否定形はキラン)……………キル形  
 「外的条件可能」は未然形+ラレル(否定形ラレン)……………(ラ)レル形  
 「内的条件可能」は可能動詞形の語幹+レル(否定形レン)……………二重可能形  
 動詞の語幹+eru……………可能動詞形  
 マス形+ダス(否定形ダサン)<sup>ii</sup>……………ダス形  
 マス形+コナス(否定形コナサン)……………コナス形  
 ～オース・ウス(否定形オーセン・ウセン)……………オース形

地域差、使用頻度差があるとは言え、ほぼ全域で観察される。つまり動詞に下接する助動詞相当の形式だけでも、7つものバリエーションが観察されるわけである。これまで、大分方言には「内的条件可能」専用の形式が存在することが注目されてきた。しかし、使い分けが明確に

されているというわけではないことが先行研究<sup>iv</sup>でも報告されている。

さて今回は、大分県南部の佐伯市<sup>v</sup>に生まれ育った高校生(2006年当時)を調査した結果を示す。この地域は上記とは異なる形式を使用すると予想されるので、その形式の意味は何かを明らかにするため、調査した。

## 1. 調査地について 大分県佐伯市<sup>v</sup>

佐伯市は、県の南端であり、大分県方言とは異なる可能表現体系を持つ宮崎県と隣接している。大分方言の中でも、他地域とは違う現象が期待される地域である。

当該地域は、大分県の南東部に位置し、平成17(2005)年3月3日の隣接町村合併によって、九州では一番広い面積を持つ市になった。九州山地から広がる山間部、一級河川<sup>はんじょうがわ</sup>番匠川に広がる平野部、リアス式海岸の続く海岸部がある。人口は82,423人(平成19年4月1日現在)。産業別人口は、第1次産業が3,938人、第2次産業が10,190人、第3次産業が21,465人(平成17年国勢調査)。

農林水産業が盛んで、野菜と果樹、スイートピーなどの花卉、豚・鶏などの畜産、お茶などが有名である。林業は、市の面積の9割近くが森林であることから、杉や檜などが多く、タケノコ・しいたけも特産品。水産業では、県内の水産業高の5割を占め、ブリ・ヒラメの養殖は全県生産高の8割を超える。漁船漁業も盛んで、イワシ類は「佐伯イリコ」として特産品となっている。

商業は大分市などの郊外型の大型商業施設に遅れをとってきたが、大分道の開通(平成20年度)などで交通インフラが整いつつあるのに従い、新たに商業施設が開設されている。

歴史的には豊臣秀吉の時代以降、毛利氏(尾張)が佐伯に封ぜられ、毛利氏の時代が270年続いた。明治になると、廃藩置県により「佐伯県」となり、その後他の地域と統合して「大分県」になった。第2次世界大戦中、佐伯は軍都・軍港として栄えたが、戦争末期には空襲で多くの市民が死亡するという悲劇もあった。戦後、最も早く工業都市として発展し、現在に至る。

今回、調査に協力いただいた大分県立佐伯鶴城高等学校<sup>vi</sup>は、市内で最も歴史の古い高等学校であり、通学する生徒の多くが若年層の被調査者として適当であると判断した。

## 2. 先行研究について

### 2-1. 大分県佐伯市方言の研究

大分県(1991)<sup>vii</sup>巻末の「大分方言文献目録」によると、佐藤(1957)「佐伯方言一斑」<sup>viii</sup>、山内(1965)『佐伯方言考』、佐伯市史編纂委員会(1974)「佐伯方言考」<sup>ix</sup>、種(1980)「地域語における動詞の活用の型の減少化 大分県佐伯市の場合」が見られる。方言集が多く、可能表現という題名を冠したものは見つからなかった。

### 2-2. 可能表現の研究

糸井・種(1977)「大野川流域における可能表現」<sup>j</sup>は、可能表現の3つ以上の形式(食ベラレン、食ベキラン、食ベレン、食ベレレン・・・)とその意味区分を示唆した。種・日高(1981)「大分県津江地方の可能表現」<sup>xi</sup>でも、それを確認している。それとともに、各形式の選択は話者の捉え方によって異なる場合もあることが報告された。この研究は日高(1983)<sup>xii</sup>にも引き継がれている。例えば「車が無い」という事態があり、それによって「行くことができない」と表

現するときに、「車が無い」という事態を自らの力のおよばない外の条件と捉える場合は「行カレン」という形式で表すが、「車の都合を付けられないのは、自分の能力が足りないせいだ」と捉えることもでき、その場合は能力による不可能である「行キキラン」という形式を選ぶということになるという。調査者が示す例文である程度の可能の意味の特定はできても、話者の読み込みを完全には排除することができない点が指摘された。

日高氏の指導の下で行われた大分大学教育学部国語科研究室(1990)『大分県豊後水道域方言地図集』<sup>xiii</sup>のNo.285~299は、可能表現についての質問とその結果(地図)である。その結果から、以下のようにまとめることができる。

表1 大分県佐伯市域の可能表現(否定形)

『大分県豊後水道域方言地図集昭和60年~63年調査』より

形式	能力可能 / 内的条件可能		外的条件可能
	動詞連用形 + キラン	ヨー / エー + 否定形	動詞未然形 + (ラ)レン
混交形	ヨー + 動詞の連用形 + キラン 例: ヨークイキラン	ヨー + 可能動詞形の否定形 例: ヨークエン	可能動詞形の語幹 + レン + (ラ)レン 例: タベレラレン

神部宏泰(1992)<sup>xiv</sup>では、『九州方言の基礎的研究』<sup>xv</sup>等の調査研究の結果などを踏まえ、「強制的な心理に支えられて、不断に新しい価値を志向するのが能力可能である」と述べている。大分方言に新しい形式キルが「能力可能」の形式として取り入れられた理由はここにあるとし、前の代の形式である可能動詞形(の語幹にレルが添加された形式)は、押し出されるような格好で「内的条件可能」に役割を得たという結論である。

国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』(=GAJ)<sup>xvi</sup>は、173図~185図が可能表現の図である。大分県の調査地点は18地点。その中で旧佐伯市域はなく、現在の佐伯市としては、宇目町と米水津村の2地点がある。質問文は能力可能、状況可能、属性可能、できる、それぞれが肯否と動詞の活用別に見られるようになっている。佐伯市中心部により近い旧米水津村の結果は、下の通りである。

表2 旧米水津村(現佐伯市)の語形(音韻記号 カタカナ、下線は報告者)

	肯定	否定
能力可能「読む」	ヨーヨム、ヨムル、ヨメル	ヨーヨマン
能力可能「着る」	キルクトガデクル	キルクトガデケン、 <u>ヨー</u> キラン
状況可能 <sup>xvii</sup> 「読む」	ヨマルル、ヨムコトガデクル、ヨムル	ヨムコトデケン、ヨメン、ヨマレン
状況可能「着る」	キルクトガデクル、キルル、キラルル	キルクトガデケン、キラン、キラレン

能力可能「する」	スルクトガデクル、シラルル
能力可能「できる」	デクル
状況可能「起きる」	オクルコトガデクル、オキラルル
状況可能「来る」	クルコトガデクル、キラルル、コルル
属性可能「書く」	カクル、カクコトガデクル、カカルル

まず、併用語形の多さが注目される。次に、「読む」には能力可能に肯定形ヨーヨムと否定形

ヨーヨマンがあるのに対して、「着る」には否定形ヨーキランがあるのに肯定形ヨーキルがないことも注目したい。

その後、九州方言研究会 (2004)<sup>viii</sup> などの可能表現への取り組みと平行して、松田 (2004) (2007)<sup>ix</sup> の大分方言における可能表現の世代差の調査研究がある。

その他の地域の可能表現研究：

渋谷 (1993)<sup>x</sup> は、通時的・共時的な面からのアプローチで全国の分布状態を樹形図にして可能表現の変遷を描き出している包括的な研究結果であり、各地方言の可能表現を考える際の必須文献である。青木 (2004)<sup>xi</sup> は歴史的・意味論的な視点からキルについて新説を立てている。

木部 (2004)<sup>xii</sup> では、前述の九州方言研究会の取り組みのまとめとして、九州各地方言の可能表現の体系をまとめている。また、中山 (2004)<sup>xiii</sup> が鹿児島方言のナル・ルル・ダスについて、山本 (2005)<sup>xiv</sup> がアスペクト形式から可能表現形式になったものについての研究を発表している。

かつては日本語の乱れとされていたが今や着実に使用者が増えている「ら抜きことば」や、その反対にレを足す「レ足すことば」など、可能表現を取り巻く状況は全国的にも変動期にあると言えるだろう。

### 3. 調査について

- 3 - 1. 調査場所 大分県立佐伯鶴城高等学校 校舎内 (大分県佐伯市城下東町7番)
- 3 - 2. 被調査者 当時佐伯鶴城高等学校の生徒で、大分県佐伯市出身者。外住歴のない1989 (平成元) 年 ~ 1990 (平成2) 年生まれの男女13人。(男:女 2:11)  
当該地域に方言の男女差はほとんどない。
- 3 - 3. 調査方法 報告者は同席していたが面接調査はせず、簡単な説明の後で一斉に用紙に回答してもらう方法をとった。
- 3 - 4. 調査票 調査票は九州方言研究会 (2004) で使用したもの (注 xviii 参照) から抜粋して25の質問文にしたものを、方言訳したときに述部はどうなるかを選んでもらう方式にした。調査票は松田 (2007)<sup>xv</sup> 稿末に掲載している。

### 4. 調査結果

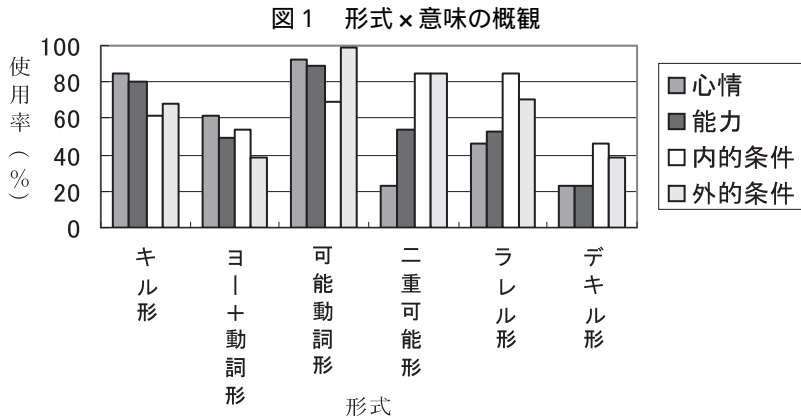
#### 4 - 1. 可能表現の形式 × 意味の概観

図1は、可能表現の6形式が「心情」「能力」「内的条件」「外的条件」の4つの意味で、使用率は何%かを示している。各質問文には、時制 (現在 / 過去) と肯否 (肯定 / 否定) も絡ませている。ここでは、意味の区分だけで各形式の使用率を見て、全体の傾向をつかもうとした。

あらかじめ用意した意味区分による質問文で回答された形式 (複数回答有り) を、被調査者の全体数で割ったものが使用率である。

調査の結果、可能動詞形の使用率が高いことがわかる。可能動詞形には意味による使い分けはなく、可能の意味全般で使われている。キル形は、「心情」と「能力」が比較的高いものの、やはり可能の意味全般で使われている。「ヨー + 動詞」も同様だが、全体に数値が低い (最高でも60%程度)。二重可能形は「心情」が極端に少ない。(ラ)レル形は「心情」「能力」が少なめで、「内的条件可能」「外的条件」が高い。デキル形は、使用が全体的に少ない (最高でも40%程度)。

可能動詞形、キル形、ヨー + 動詞は、おおむね可能の意味全般で使われていることがわかる。



4 - 2 . ヨー + 動詞 (肯定形と否定形) の使用率

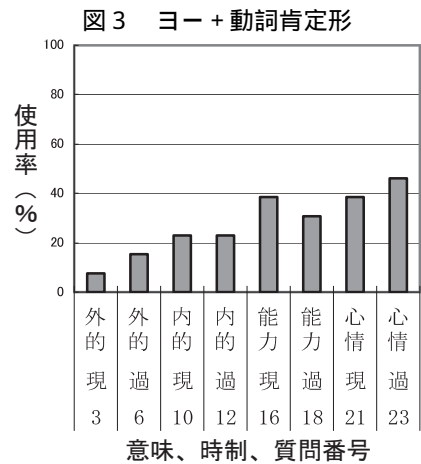
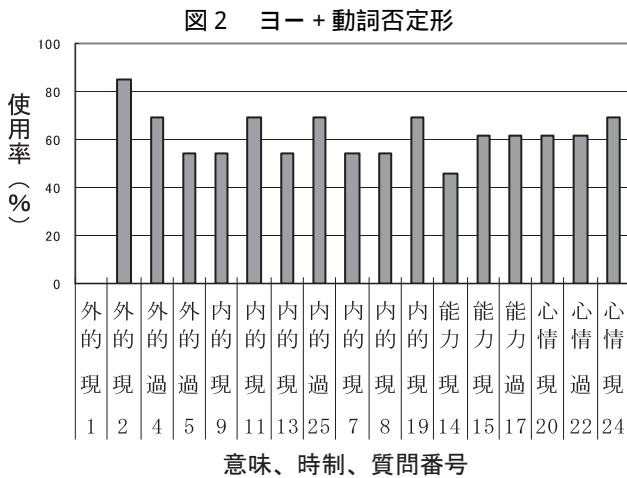


図2と図3からわかるように、「ヨー + 動詞形」の場合、動詞部分が否定形の場合と肯定形の場合では、使用率が大きく異なる。前者は84.62~46.15%、後者は46.15~7.69%であった。肯定形の中でも、「心情」「能力」は比較的使用率が高い。なお、質問番号1は、調査票の選択肢に「ヨー + 動詞形」を入れ忘れてしまったためであり、さらに一番目の質問だったこともあってこのような結果(0%)になったと考えられる。

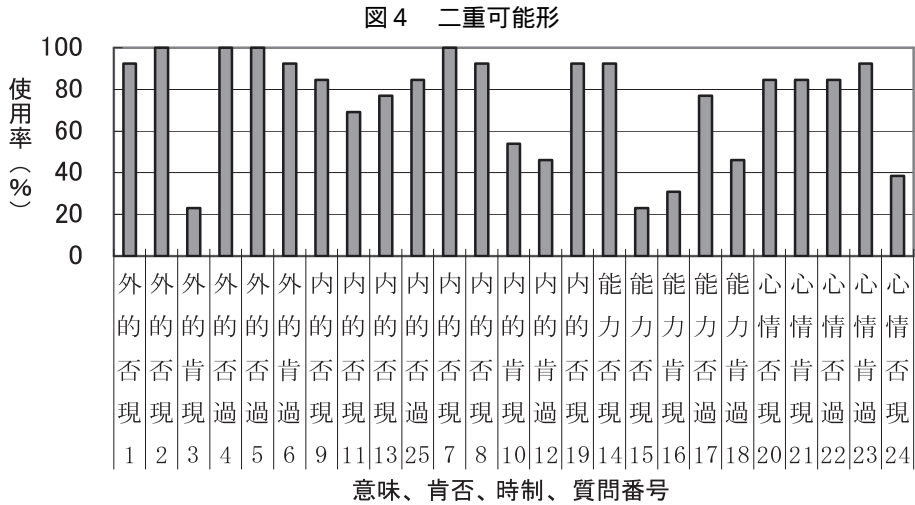
「ヨーイケン」「ヨーオヨゲン」「ヨーイケレン」などの、ヨー + 動詞と可能動詞形の混交形あるいはヨー + 動詞と二重可能形の混交形が観察されるが、すべて同一人であった。このような混交形はどの程度広がっているのか、さらに調査する必要がある。

4 - 3 . 二重可能形 (可能動詞の語幹 + レル) の使用率

図4を見ると、二重可能形の使用率が非常に少ないところが注目される。松田(2006)(2007)と同様の結果であり、3番は「来る」、15番、16番、18番は「もぐる」、24番は「渡る」である。

二重可能形にすると、コレレン、モグレン、ワタレンとレンというレの連続が生じる。この調査票の「もぐる」を使用する質問文3つの全てで非常に少ないという結果が出た。

今回の調査では、二重可能形において「内的条件」が特に高い使用率ではなかった。先行研究では二重可能形は「内的条件」の意味を表す形式であるとされていたが、当該地域ではそのような傾向は見出せない。どちらかと言えば、「外的条件」の使用率が高い。



#### 4 - 4 . キル形とラレル形の関係

キル形とラレル形は表1で示したように、先行研究ではそれぞれ「能力」、「外的条件」を担当する形式であり、間に「内的条件可能」を挟んで、相補的なグラフになることが予想されたが、結果は相補的ではなかった。キル形は「能力」や「心情」で比較的安定した数値であり、その際(ラ)レル形はキル形よりも低めに安定している。

#### 4 - 5 . その他の形(オース、ダス、コナス)

その他として、わずかながら使用のあった形式を報告する。ウス・オース形は否定形「オーセン」のみで1人、コナス形は2人、ダス形は否定形「ダサン」のみで1人の話者が答えた結果である。ダスを見る限り、設定された意味による使い分けはないと言ってよいだろう。いずれにしても使用する人が限られており、今回の調査からは可能表現としては衰退している形式だろうという予測ができるだけである。

### 5 . 考察への覚書

#### 5 - 1 . 肯定形に制限のあるヨ- + 動詞形

今回の調査結果から、否定形と肯定形の出現する度合いが異なる形式があった。4-2のヨ- + 動詞における否定形と肯定形の使用率を見ると、その差は明らかである。肯定形と否定形のアンバランスがある場合、当該形式の使用初期あるいは衰退期のどちらかである。先行研究から考えると、ヨ- + 動詞は当該地域では比較的古い形式であるから、衰退期であると考えられる。国立国語研究所(1999)を見ると、この形式は関西地方を中心とした分布の一部だと見て間違いない

と思われ、現在はキル形や可能動詞形に追われる状況にある。

可能表現は「～できる」より「～できない」の頻度が高い。言い訳や謙遜など、普段の言語生活にそのような傾向があるためである。よって、まずヨー＋肯定形が先に衰退し、全体の出現頻度が減ることからやがてヨー＋否定形にも違和感を感じ始め、使われなくなっていくことが予測される。あるいは、ごくわずかな数例のみ慣用句的に残るという可能性もある。

可能動詞形が盛んなのは、共通語と同形という威力があるためであろう。先行研究を見るとヨムル、キルルなど二段活用の可能動詞形が記録されていることから、その歴史の解明が望まれるところである。

キル形も「向こう岸まで泳ぎきる」などの「完遂」を意味する～キルという形式が共通語にある。共通語の活用は一段活用で否定形がキレンであり、当該方言の活用は五段活用で否定形がキランであるが、キルという肯定形が共通語と同形という支えがあって広まっていると思われる。

(ラ)レル形は、当該地域では「外的条件」「属性」を表すのみで、「能力」は表さない形式だった(「する」の「能力可能」であるシラルル以外)のが、今回は他の意味にも使用が見られた。また、「外的条件」においても可能動詞形には及ばない使用率(80%程度)だった。(ラ)レル形のように五段活用動詞にレルを下接するのは、受身と尊敬の意味でも使用される形である。特に大分方言では、「そこに座ラレてください」「しばらく待タレてください」のような(ラ)レてください敬語<sup>xvi</sup>と呼ばれる言い方が盛んであり、可能表現としての(ラ)レル形には抑制がかかっているものと考えられる。

二重可能形は可能動詞形よりも古いということは考えられない。可能動詞形に補強を加えるために作られた形であろう。前述の日高・種(1981)には、

「主観状況可能(=内的条件可能)」の形式は以前は可能動詞形であった。しかし、その後それに「ルル(レル)」という二段(一段)に活用する助動詞を一律に接続することによって、更に安定した語形を志向する姿と見なすべきであろう。

とある。この成り立ちを図示すると表3のようになる。

表3 二重可能形の成り立ち 日高・種(1981)より

	(ラ)レル形	可能動詞形	二重可能形
五段動詞	ヨマレル yom-a- <u>reru</u>	ヨメル yom-e-ru	ヨメレル yom-e- <u>reru</u>
一段動詞	タベラレル tabe-ra- <u>reru</u>	タベレル tabe- <u>reru</u>	(タベレレル) (tabe-re- <u>reru</u> )

デキル形についても、使用率の全体的な低さから可能表現の中心的な位置は占めていないこと、いずれかの意味の区分を担っているとも言えない。4-5.その他の形式で述べた3形式においても衰退現象が見られるので、これらは古い形式だと言える。

#### 5-2. 前接する音環境に制限のある形式

二重可能形については4-3.で述べた通り、コレレン(来れない)、モグレレン(潜れない)、ワタレレンのように「レレ」となるような場合、この形式の使用は避けられる傾向にあることがわかった。このことを変遷という視点から考えてみる。

表3のように、二段(一段)動詞にはタベレレルのような「レレ」が生じる可能性があり、実際に記録されてもいる。今回の調査では一段活用動詞が、たとえば「タベレル」であればタベラレルの「ら抜き」現象なのか、それともタベレレルの「レ抜き」現象なのかがわからないため、

調査項目から外した。筆者が住んでいる大分市でも若年層に「レレ」の連続は観察されない。「レレル/レレン」はレの過剰な添加という意識があると考えれば理解しやすい。

以上のことから、当該方言の可能表現形式は五段動詞には「レ足す」現象が、二段(一段)動詞には「ラ抜き」現象が観察され、レルを一律に下接するという単純化が起こっていると結論付けられよう。しかし、今後二重可能形は不完全な広がり方しかできないと予想される。当該方言にとって比較的新しい勢力であるが、若年層には制限が生じて可能動詞形に逆戻りしている。

表4 二重可能形におけるレルの連続を避ける方法

	(ラ)レル形	可能動詞形	二重可能形
五段動詞	ワタラレル watar-a-reru	ワタレル watar-e-ru	ワタレレル watare-reru
			ワタレル wata-reru

最後の「ワタレル」はレルがひとまとまりと捉えられている点で、可能動詞形とは異なる。表4のように二重可能形は可能動詞形から発展したが、レルの連続となった場合は可能動詞形の形に戻す措置をとっているため、現状を見る限り、可能動詞形から完全に独立することができないのである。

### 5 - 3 . 宮崎県方言との比較

国立国語研究所(1999)の結果では、宮崎県にもヨー+動詞形の分布があるが、「能力」の意味しか表さない。分布を見ると、大分県~宮崎県の東海岸が当該形式の西端になっている。大分県内では、ヨー+動詞の本来の意味「能力」が薄れていると言えるだろう。宮崎県はヨーのほかエーやヤスになる場合もある点が、関西方言の形とは異なっている。また、宮崎県内の可能表現形式は多彩で、「能力」がヨー+動詞形、「外的条件」が(ラ)レル形である地域は東海岸部で、ほかに可能動詞形、鹿児島県と接する地域では~ガナル(ガナッ)も分布している。また、県の中央地域ではコトガデキル形が分布している。

今回の調査地である佐伯市は、宮崎県に接する大分県最南端の地域である。ヨー+動詞形の九州での中心地は宮崎県で、佐伯市は分布の北端に位置する。佐伯市ではキル形や可能動詞形に取って代わられる傾向にあることから、九州ではヨー+動詞の広がりは今以上はないと考えられる。

## 6 . 大分県佐伯市の若年層の可能表現の実態

以上から、当該地域での若年層使用の古い形式はヨー+動詞、(ラ)レル形、(可能動詞形)、デキル形、ウス・オース形、コナス形、ダス形であり、一方の新しい形式はキル形、二重可能形であると言える。可能動詞形は少なくとも二重可能形より古い形式だが、高校生の使用率は非常に高く、また、共通語と同様に可能の意味の区別なく使われていることが調査の結果わかった。考察の結果、当該地域における若年層の可能表現の実態は表5のように表せる。



表5 大分県佐伯市の若年層の可能表現

形 式	能力可能	内的条件可能	外的条件可能
		可能動詞形	
	<新>キル形 <古>ヨー + 動詞		<新>二重可能形 <古>(ラ)レル形

点線部分はあくまでも傾向であり、区分とは言えないものである。今回捉えた現象は、高校生という限られた範囲のものであり、今後、各年代の調査をすることによって、当該地域の体系が明らかにできると思われる。

## 【附記】

今回の調査は、2006年に大分県立佐伯鶴城高等学校に在籍し、10月4日に行われた「鶴城大学」の「文学」を選んでくれた生徒の皆さんと、同校の国語教諭であった長木先生のご協力の下に行われました。記して心より感謝いたします。

## 註

- <sup>i</sup> 「外的条件可能」は「内的状況可能」は、それぞれ「客観状況可能」「主観状況可能」とも呼ばれる。前者は渋谷勝己の命名であり、後者は大分県の種友明、糸井寛一、日高貢一郎らの命名である。「能力可能」は動作主体の能力によって当該動作ができる／できない、「外的条件可能」は動作主体外の条件によって当該動作ができる／できない、「内的条件可能」は動作主体内ではあるが一時的な条件によって当該動作ができる／できないを表す。
- <sup>ii</sup> 「マス形」とは「飲みます」「見ます」などの「ます」に接続する時の動詞の形。
- <sup>iii</sup> ダスは「機会の有無による可能表現」と呼べるかもしれないが、地域によってはその意味に限らず使用がある。ダス、コナス、ウス（オース）については、松田（2006）「可能表現における世代差の追究～大分県内6地点通信調査から～」（別府大学文学部国文学科『別府大学国語国文学』第48号）松田（2007）「大分方言における可能表現の地域差・世代差～通信調査の結果および考察～」（別府大学『別府大学紀要』第48号）に通信調査による実態調査結果がある。
- <sup>iv</sup> 種友明・日高貢一郎（1981）「大分県津江地方の可能表現」（『大分大学教育学部研究紀要』5・6）  
日高貢一郎（1991）「可能表現」『大分県史 方言篇』（大分県）などによる。
- <sup>v</sup> 佐伯市ホームページ <http://www.city.saiki.oita.jp/> を参考にした。
- <sup>vi</sup> 佐伯鶴城高等学校ホームページ <http://saikikakujou-h.oita-ed.jp/index.html> を参考にした。
- <sup>vii</sup> 大分県総務部総務課（1991）『大分県史方言篇』
- <sup>viii</sup> 佐藤蔵太郎（1957）「佐伯方言一斑」（『南海部郡史』）
- <sup>ix</sup> 佐伯市史編纂委員会（1974）「佐伯市方言考」（『佐伯市史』）
- <sup>x</sup> 糸井寛一・種友明（1977）「大野川流域における可能表現」（大分大学教育学部編『大野川 自然・社会・教育』所収）
- <sup>xi</sup> 種友明・日高貢一郎（1981）「大分県津江地方の可能表現」（『大分大学教育学部紀要 大分県津江地域特集』）
- <sup>xii</sup> 日高貢一郎（1983）「大分県国東半島の可能表現」（大分大学教育学部編『国東半島 自然・社会・教育』）
- <sup>xiii</sup> 大分大学教育学部国語科研究室（1990）『大分県豊後水道域方言地図集昭和60年～63年調査』
- <sup>xiv</sup> 神部宏泰（1992）「九州方言における可能表現法・形式の隆替と表現特性-」（『九州方言の表現論的研究』和泉

書院)

- xv 九州方言学会編 (1969)『九州方言の基礎的研究』(風間書房)
- xvi 国立国語研究所 (1999)『方言文法全国地図』第4集
- xvii 先述の外的条件可能、客観状況可能と同じ。
- xviii 九州方言研究会編 (2004)『西日本方言の可能表現に関する調査報告書』
- xix 松田美香 (2004)「可能表現の変遷 大分郡挾間町の三世代」(『別府大学紀要』第45号) (2006)「可能表現における世代差の追求～大分県内6地点通信調査から～」(『別府大学国語国文学』第48号別府大学国語国文学会)
- xx 渋谷勝己 (1993)「日本語可能表現の諸相と発展」(『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊)
- xxi 青木博史 (2004)「複合動詞『～キル』の展開」(『国語国文』第37巻第9号 京都大学)
- xxii 木部暢子 (2004)「九州の可能表現の諸相」『国語国文薩摩路』第48号鹿児島大学法文学部国語国文学研究室
- xxiii 中山久美子 (2004)「鹿児島県川内町における可能表現法 「ナル」「ルル・ラルル」「ダス」を中心として」(『言語文化論叢』創刊号 琉球大学言語文化研究会)
- xxiv 山本友美 (2005)「九州方言における可能表現の変遷 アスペクト形式からの文文化」(九州方言研究会第20回発表レジュメ)
- xxv 松田美香 (2007)「大分方言における可能表現の地域差・世代差 通信調査の結果および考察」(『別府大学紀要』第48号) pp .13-14
- xxvi 日高貢一郎 (1996)「『～されてください』考」(『平山輝男博士米寿記念論集日本語研究諸領域の視点』pp .103～127 明治書院)